

京芸通信

Kyo-gei Tsushin

京都市立芸術大学

Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

Vol. 017

京都市立芸術大学

広報誌

2014年 1月



特集

芸術による 東日本大震災復興支援

教員や学生が継続的な支援を続けている
様々な活動を紹介

金のたまご

小野村直人／アンサンブル・リュネット

京芸の授業

客員教授・特別講師による授業

京芸で、日本の
伝統音楽に触れる

客員教授 時田アリソン

大船鉦の裾幕などを京芸生がデザイン／アピチャップン・ウィーラセタクン氏等を若手芸術家育成事業の講師として招へい／ギャラリー@KCUAのアウトリーチ企画展を渋谷ヒカリエにて開催／芸術資源研究センター開設へ／京都市バスを京芸院生のデザインでラッピング／産業技術研究所との包括連携協定の締結／管・打楽専攻にサクソフォン科目を新設／

京芸ニュース

2013.4 - 12

京芸の教員

新任・退任教員の紹介

リレーコラム

音楽学専攻教授 柿沼敏江

芸術による

東日本大震災復興支援

宮城県女川町における復興支援プロジェクト



「迎え火」の開催

女川町を訪れて、活動のいろんなアイデアを出していた時に、「震災を焚き火のおかげで生き延びた。」という意見が出ました。避難所生活のときは、暖をとるために、グラウンドで焚き火をして、そこに自然に人が集まり、皆で顔が見える状態で話をして、いろんな物事が決まっていたのですが、仮設住宅に住むようになると、個人と個人が直接、対話する機会がなくなってきたそうです。そういった中、復興連絡協議会会長の鈴木敬幸さんが、「焚き火を復活したい。」と言われたんです。



わかっていただんだと思います。そういうものが行えるまちのあり方を考え、津波で流された家があった敷地に、家族などの単位で集まり、招魂の意味合いも含めて、小さな焚き火をする、「迎え火」を行うことになりました。

京都市立芸術大学では、震災直後から芸術による復興支援活動を展開しており、今後も東北の皆様と築いた関係を大切にしながら、継続してまいります。

小山田徹准教授と学生有志9名が、宮城県女川町において、「顔が見える、個人的な関係の支援活動」を展開しています。小山田准教授にプロジェクトの内容をお聞きしました。

女川町の皆さんへ

震災直後に、知り合いの建築家である海子揮一さんを通じて、宮城県女川町のまちづくりを担われている方々と知り合い、女川のまちづくりに関わるようになりました。

まずは、女川の皆さんが集い、女川の将来を語り合う場を復活させようという話になり、友達のアーティストに協力してもらい、コミュニティカフェを作りました。その後、その仲間達と一般社団法人「対話工房」を立ち上げ、継続的に女川で支援活動を行っています。

僕が、女川で活動を始める傍ら、大学では、学生から震災関連の授業ができないかという相談を受け、震災直後の4月から、テーマ演習「共有空間の獲得」(※1)を始めました。学生にもこの女川の輪の中に少しずつ参加してほしいと思い、受講者から希望者を募って連れて行っていました。

学生グループ「Trans/トラム」

大学の授業では、「迎え火」の開催準備を中心に、実際に仮設の小屋を作って「共有空間づくり」を実践し、学内の人々の集まり方の変化などを話し合いました。この小屋の形が電車に似ていたので、学生達が、英語で「ちんちん電車」、「結ぶ、つなぐ」という意味の「Trans/トラム」と名付け、女川町で有志で活動する学生のグループ名も同じ「Trans」になりました。8月に女川で開催された「迎え火」には、学生約30名が参加しました。この企画の頃には、学生達も地元の方々とも顔見知りになっていて、僕は、対話工房の事業があつて、月に1回程度は、女川に行っていたんですが、学生も自主的に参加してくれました。



※1 テーマ演習 (2ページ)

京都芸大独自の教育カリキュラム。一定のテーマに沿って、学生と教員が専攻を越えて実践的な研究活動を行うことで、芸術に関わる幅広い視野と探究心、コミュニケーション能力を養う。研究テーマを学生から提案できることもこのカリキュラムの魅力の一つ。「共有空間の獲得」では、現在の生活やコミュニティの在り方を見直し、それらが将来どうあるべきかを、実践を通じて考えている。

※2 出島 (4ページ)

女川町中心部から北東にある島。対岸とは最も近い所で300mしか離れていない。面積2.68km²、人口約370人。宮城県最大規模の貝塚群がある。東日本大震災では津波で住宅の8割近くが全壊し、25人の死者・行方不明者を出した。



小山田徹 KOYAMADA Toru

1961年鹿児島に生まれる。京都市立芸術大学日本画科卒業。84年、大学在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。ダムタイプの活動と平行して90年から、さまざまな共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アートスケープ」「ウィークエンドカフェ」などの企画を行うほか、コミュニティカフェである「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加。2010年から本学教員。日本洞窟学会会員。

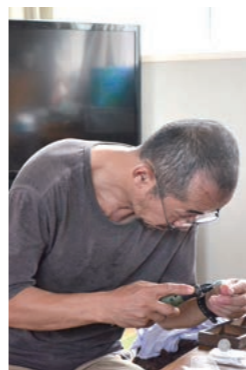
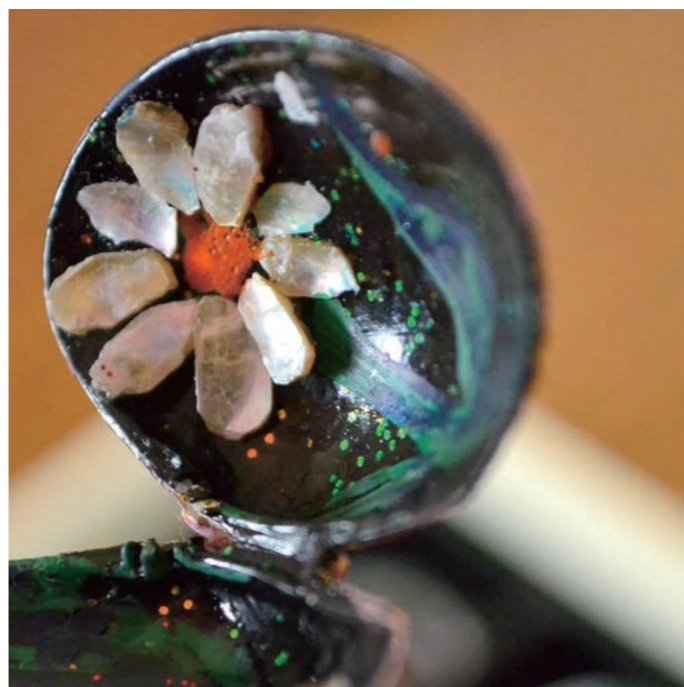
出島での交流の場づくり

復興事業を行ううえで、地域の地理的、歴史的な知識をベースとして持つておかねばならないと考え、女川町を調査して、その中で、女川の出島(※2)に遺跡があるということがわかり、訪れるようになりました。

出島を訪れた時に、学生が、島の貝殻を利用してアクセサリーを作り販売するというアイデアを出し、島のおばあちゃん達と一緒にアクセサリーづくりのワークショップを開催しました。おばあちゃん達は、完成したアク

セサリーをすぐく気に入ってくれて、この取組を進めて行くことになりました。

また、出島で出会った木村洋子さんは、島を訪ねる人が増えるよう、木村さんの小屋を、島を訪れる人達の休み処や、貝のアクセサリーづくりの作業場に変えたいと考えておられて、今後、学生と一緒に、中を改装したり、作業道具やカフェセットを揃えたりする予定です。



人を想うことで人は強くなり成長する

これらの取組は、まちの復興や活性化が目地的なのですが、本当は、女川町の皆さんに元気であってほしいというだけなんです。よね、まちを支える方々にも支えになるものが必要で、支える意味で、交流の場作りができないかと考えています。

先日木村さんから電話があって、「あの子、就職決まったかなあ」と、本当に学生のことを心配してくれるんですよ。この活動のテーマは、「人を想う」ということです。人を想うことで人は強くなり、成長するんですね。女川の皆さんも学生達を想うことで元気が出ると思いますし、学生達も女川に行つて震災の事を考えたり、女川の人のことを想うのですが、そのことを通して自分を見つめ直しています。今の未熟な自分を一人で考えていると不安になるのですが、誰かに頼られたり、他人のことを心配する過程で、自分を見つめ直し、「応えるためには、このスキルを身につけたい」と考えて、成長していくんです。復興支援といつても、逆にもらっていることの方が多。学生達もこの活動で、めきめきしっかりしてきていますもんね。また、こういった活動をする時に「美術の力」が加わると、すごく内容が充実するんですね。

学生達は、いずれ社会に出て自立するわけですが、女川での経験や感覚が残っていれば、どんなことも、「人との関係」と「美術の力」で乗り越えられると思います。



tramsに集まって話し合う小山田准教授と学生

私は、被災地である岩手県陸前高田市の出身で、地元に戻って、ボランティアをしましたが、震災直後は、力仕事とか、直接お手伝いすることにしか意識がいていりませんでした。tramsに参加したのは、少し状況が落ち着いて、せっかく芸大に在るので、復興に芸術の面で協力できないかと思ったからなんです。地元では、人によって被災の状況が違って、そのことで壁ができて、どんなに仲の良い友達でもわかってあげられないところがあります。そういったギャップは、震災に限ったものではなく、普段の生活の中にもあって、被災地での問題は普段の生活の問題に繋がっていると感じています。

【濱口芽 / 油画専攻3回生】



(写真左から) 濱口さん、勢野さん、橋本さん

女川町での活動から帰った直後は、女川の事を考えているんですけど、普段は京都に住んでいるので、しばらく経って記録を見た時に別世界を感じる時があります。何度も行っているのに距離を感じてしまっていて、女川の方と電話したりすると、ずっと距離が縮まるというのを繰り返しています。女川で何かができているという感覚はまだなくて、核心の話はできていないように感じています。それでも、女川の皆さんと焚き火を囲んでご飯を食べたり、そこで過ごした楽しい思い出があって、また行きたいと思うんです。小さい子が、行く度にどんどん大きくなっていくのを見たりすると、気になっちゃうんですね。

【勢野五月葉 / 日本画専攻修士課程1回生】

女川町に行つて、いろんなものを見て、女川の皆さんや先生と話をしながら、考えることで、自分の世界が広がっていると感じています。僕は、阪神淡路大震災で被災した神戸市長田区の出身で、今、まちは復興を遂げ、外部から多くの人が訪れ、賑わっていますが、地域の人にとって本当に良い形でのまちの賑わいやコミュニティの在り方とはどういったものなのかなど、女川町の活動に参加して、自然と地元のことを考えるようになりました。また、僕はグラフィックデザインを学んでいるので、女川での経験がフィードバックできるんじゃないかと考えています。

【橋本隆史 / ビジュアル・デザイン専攻4回生】

チャリティオークション 「SILENT@KCUA2013」



女川港大漁獅子舞
「まむし」リーダー
岡 裕彦 さん

ずっと京都芸大の皆さんに舞を見せたいと思っていて、今日は感謝の気持ちを込めて舞わせていただいた。

京都は、人が温かい。京都芸大もそうだが、京都は専門家が、そういう人たちが集まったコミュニティが出来上がっていて、そこが印象的だ。学生さんには、自分の思うことを心から素直に表現できる人に育ってほしい。

2011年度、2012年度に引き続き、教職員や学生の有志により、東日本大震災災害支援チャリティオークション「SILENT@KCUA (サイレントアクト) 2013」を開催しました。

2013年度も、上村淳之氏、草間彌生氏、山本容子氏、梅原猛氏をはじめ、本学の教員、元教員、在学生及び卒業生が多数出品し、本展の来場者総数は1781人、総入札数は2282件、落札総額約885万円と、いずれも過去最高の実績をあげることができました。

復興支援活動の一環として、宮城県女川町において、津波で流された獅子頭を新調されるに当たって、漆工専攻の安井友幸准教授と同専攻修士2回生の下泊良輔さんが漆の加工装飾を施すなどのお手伝いをさせていただきました。その御縁で、本展のオープニングでは、同町の獅子舞グループ「まむし」の皆様が奉納舞を御披露いただきました。また、会場内では、学生主体の震災復興プロジェクト「Trans/トラム」のボランティア活動内容の展示も行いました。

今後、本展の収益は、東日本大震災の復興に関わる活動を行う芸術団体等に寄付する予定です。

被災地支援の思いを音楽に乗せて



「音楽で被災地の方を支援しよう」と、音楽学部が始めたのはチャリティ演奏会。被災地で頑張っておられる多くの方々に、1日でも早く笑顔が戻るようお願いを込めた演奏会を続けています。

2011年度と2012年度は、「メサイヤコンサート」と題して開催。増井信貴教授の指揮のもと、G・F・ヘンデル作曲《メサイヤ》よりハレルヤコーラスを、本学大学院アカデミーオーケストラの管弦楽の調に乗せて、学部生、大学院生が高らかに歌い上げました。2012年度からは、企画の趣旨に賛同していただいた市民合唱団も参加して、舞台はさらにスケールアップ。また、2013年度は、「親子で聴ける楽しいクリスマス・チャリティコンサート」と題し、小学生以上のお子さんも楽しめるクリスマスコンサートとして開催。J・S・バッハの《マニフィカト》や《諸人こそりて》などの名曲を披露しました。

チャリティ演奏会は京都新聞社との共催事業として開催してきており、演奏会の収益金は、京都新聞社会福祉事業団を通じて被災地に寄付しました。

「海嘯に祈むー復興にアート之力をー」



(上) 沿岸部で地域の方からお話を聞く教員と学生
(下) 地震・津波で骨組みのみとなった防災対策庁舎

宮城大学から、宮城県南三陸町における、芸術による復興支援プロジェクト「海嘯に祈むー復興にアートの力をー」への参加の要請があり、金沢美術工芸大学とともに本学も参加しました。

このプロジェクトは、「海嘯(地震・津波を表す言葉)により失われた命や地域の宝への祈りを捧げるとともに、若い力の想像力によって辛い記憶すら祈みこんでいく」という気持ちを込めて実施されるもので、宮城大学が中心となり、金沢美術工芸大学、本学と連携し、三大学のアーティストやデザイナーが、同町を訪れ、現場を体感し、その経験を基に、作品を制作・発表し、同町に新たな息吹を吹き込むというものです。

2013年9月、スタートの取組として、美術学部構想設計専攻の山本麻紀子非常勤講師と金麻里さん(構想設計専攻修士課程1回生)、杉川由希さん(構想設計専攻3回生)の3人が同町を訪れ、地域の方々に地震や津波により被害を受けた場所を御案内いただき、お話を伺いました。

今後、この視察の経験を基に、アート作品の構想を練り、宮城大学に提案を行います。宮城大学では、各大学のアーティスト等から提案された作品の相関性を議論し、作品群としての方向性を見出したのち、2014年度以降に、作品の制作と展示の準備を進められます。

陸前高田市の方々和学生のものづくりを通じた交流



岩手県のリアス式海岸をイメージしたアクセサリ



学生が作った製品サンプルを吟味する徳山さん

テーマ演習「岩手の手作り工房と一緒に商品開発」という授業において、担当教員の藤井良子講師(染織専攻)と学生33名が、東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市で「手づくりによる復興」に取り組みされている方々と、ものづくりを通じた交流を行っています。

陸前高田市の仮設店舗で手芸店を営む徳山恵美子さんは、被災地の方々が集い、手芸を楽しむ場を提供することで、震災で分断されてしまったコミュニティを新たに作られるとともに、参加者の方々が手作りの製品を販売し、その収入を参加者に支払うことで生活を支援されています。

この授業では、受講する学生が、市場調査を行い、本学で培った技術力、発想力を生かして、徳山さんの店舗で制作する製品の企画及びサンプル制作を行いました。それらの成果を、藤井講師と受講した学生の代表として、志知希美さん(染織専攻修士課程1回生)が陸前高田市を訪れ、徳山さんに提案しました。

2013年度末の販売開始を目指して、現在、徳山さんと製品の制作について具体的な相談をすることともに、製品の販売場所を検討しています。

学生だけで全国規模の公募展開催に挑戦

次世代工芸展



クラシック音楽に新たな光を当てる僕らなりのアプローチ
アンサンブル・リュネット

「金のためご」と題し、芸術への熱い想いを胸に活動する京芸生を御紹介します。
学生主催で全国規模の公募展「次世代工芸展」を開催した小野村直人さん（漆工専攻4回生）と、男性4人組みのパフォーマンス・グループ「アンサンブル・リュネット」で活動する森本英希さん（音楽研究科博士（後期）課程2回生）に、取組内容や今後の展望を語ってもらいました。

次 世代工芸展は、2013年度に初めて開催した若手工芸作家の公募展です。実行委員会は学生のみで、私は代表を務めました。工芸というものの幅広さ・自由な造形・新しい見方などを広く伝えたいという趣旨のもとに、陶芸、染織、漆芸、ガラス、金工、木工など幅広い分野から、95名の作家に出品していただきました。

開催場所は80年の歴史を有する京都市美術館の別館。美術を学ぶ学生にとつて最高の場所ですが、開催経費は、企業等から協賛金等は得ずに、出品料で賄う方式にしたので、どれだけ多くの作家の方に出品していただくかが開催の成否を握っていたんです。そこで、精力的に全国を営業して回ったんですが、それまでの活動で知り合った美術界の方々や友人

たちの協力と熱意もあって、予想以上の反響をいただきました。私の展覧会開催の経験は、2回生の終わりに高校時代の同級生とグループ展をやったのが初めてです。お客様と直接お話しする喜びを知ったのはこの時ですね。私は、高校生のときに漆の艶やかな質感に虜になって以来、もっと多くの方にその魅力を知ってもらいたいという思いを持っているんですが、その時から、漆の魅力を伝えられる活動として、展覧会の企画という方法を意識するようになりました。

開催場所は80年の歴史を有する京都市美術館の別館。美術を学ぶ学生にとつて最高の場所ですが、開催経費は、企業等から協賛金等は得ずに、出品料で賄う方式にしたので、どれだけ多くの作家の方に出品していただくかが開催の成否を握っていたんです。そこで、精力的に全国を営業して回ったんですが、それまでの活動で知り合った美術界の方々や友人



小野村直人（おのむら・なおと）
2009年 京都市立銅駝美術工芸高等学校卒業
現在 京都市立芸術大学美術学部工芸科
漆工専攻 4回生
「五芸大漆工展」（2012年、ART SPACE SHI GEMATSU / 京都、ぎおんギャラリー八坂 / 京都）、「次世代工芸展」（2013年、京都市美術館）の実行委員会代表を務める。
「京もの工芸品 京都オークション」、「日本アンデパンダン展」、「京展」などに出品。1週間限定のカフェギャラリー「muku cafe」を他大学の学生アーティストたちと開催するなど、アートを身近に感じてもらう企画も行っている。ArtMind登録アーティスト。



アンサンブル・リュネット
4名の男性フルート奏者、森本英希（音楽研究科博士（後期）課程在籍）、谷風佳孝（2001年音楽学部卒業）、江戸聖一郎（音楽研究科博士（後期）課程在籍）、小山真之輔（2006年音楽学部卒業）によって、2008年に結成されたパフォーマンス・グループ。「リュネット」はフランス語で「メガネ」を意味し、メンバー全員がメガネを着用。第16回日本フルートコンヴェンションコンクール・アンサンブル・アワード部門第1位受賞。2012年5月、1st CD「エイトレンゼス〜僕らのメガネは伊達じゃない〜」をリリース。
森本は、テレマン室内オーケストラフルート奏者、ムラマツフルートレッスンセンター講師として、谷風は鍵盤ハーモニカ奏者、歌手、フルーティストとして、江戸はザ・カレッジオペラハウス管弦楽団フルート奏者として、小山は指揮者、ドルチェ音楽教室講師としても、それぞれ活躍している。

からの依頼演奏の機会も増えてきましたし、後半に期待してくださるお客さんも多くいらっしゃいます。新ネタが受け入れられるか不安ながらも挑戦している僕らとしては、とても嬉しくて心強い存在です。リュネットがこういうプログラムでやるようになったのは、もちろん自分たちがやっていて楽しいから！だけではないです（笑）。「クラシック音楽が身近なものであってほしい」という思いに、僕らの笑いを求める性格が合わさると、「気楽に、笑いとともに」お客さんに届けたいという考えが自然と生まれてきたんです。さらに、僕と江戸君は古楽器の奏者、谷風君は鍵盤ハーモニカ奏者、小山君は指揮者としても活動しているから、フルート以外の特技も生かしたプログラムができるんです。

笑って楽しんでもらうのは音楽家として異色ですけど、そこは、一般に「カタイ」イメージがあるクラシック音楽に新たな光を当てる僕らなりのアプローチで、多様化する演奏会の一つの在り方だと思っています。リュネットの活動が、何らかの形となって見えるとしたら10年は必要だねと言っていて、毎年4月1日には定期演奏会をしています。エイプリルフルールの約束です。もちろん開催してきていますよ（笑）。僕らは、フルート奏者の顔や講師、大学院生の顔を持っていて、音楽家としてキャリアも積んできているから、そこに「遊び」を取り入れながら成長していくのは、バランスを取るのが結構難しい。それでも、人々をクラシック音楽へ引き寄せる可能性を追求しました。これからも、他の楽器とコラボしたりして、いろんな面から腕を磨いてパフォーマンス力を上げていくので、期待しててください。

客員教授による授業

京芸の授業

京都芸大では、世界を舞台に活躍する著名な方々を講師としてお招きしています。2013年度からは、新たに客員教授による授業も加わって、学ぶ機会を充実させており、その授業の様子の一部を御紹介します。



大友直人氏

「第145回定期演奏会」(11月28日開催)において客員指揮者として出演した大友直人氏が、11月22日から28日まで、本学でオーケストラのレッスンを行いました。

定期演奏会の曲目は、千住明作曲《オペラ万葉集〜二上挽歌編〜》、レスピーギ作曲の交響詩《ローマの噴水》、《ローマの松》。アンサンブルをより精緻なものにし、表情の豊かな音楽を共に作る事を目標に指導された大友氏は、本学の学生について、「練習の度ごとに、私が言うことによく応えて下さって、本当に素晴らしい。」と称賛されました。学生には「音楽そのものをお客様に伝えるという意識を普段から持って、試験でもコンサートでも臨んでほしい。」とメッセージを送りました。



森村泰昌氏

名画の登場人物や女優に扮したセルフポートレートで知られる美術家・森村泰昌氏が、6月26日から7月5日まで、本学のスタジオにおいて新たな作品の制作を行い、その様子を学生に公開しました。

作品は、17世紀スペイン絵画の巨匠ディエゴ・ベラスケスの作品「ラスメニーナス」をもとに制作するもので、学生スタッフは、プロのスタッフに混ざって、緊張しながらもスタイリング等のアシスタントとして制作に携わりました。9日間にわたる撮影は、森村氏と制作スタッフ、そして学生スタッフが培ったチームワークが功を奏し、非常にスムーズに終わることができました。

森村氏が扮した絵画の中の登場人物の写真は、全17点の作品に仕上げられ、9月28日から12月25日まで、資生堂ギャラリー(東京)で発表されました。



皆川魔鬼子氏

テキスタイルデザイナーであり、株式会社イッセイミヤケの取締役である皆川魔鬼子氏による授業が、11月22日に開催されました。

染織専攻の学生をはじめ工芸科、デザイン科の学生約60名は、事前に皆川氏からの課題「自分のお気に入りの服をハンガーにかけた状態と床においた状態の2つのパターンのデッサン」を準備して受講。皆川氏は、学生一人一人に助言・指導されました。

また、皆川氏が手がけた作品を題材に講義され、「大学の授業の内容から発展させ、良いデザインが生まれた事例をいくつも知っています。今後制作の道へ進まれる方は、特に、授業の内容をどんどん吸収してほしいです。」と、学生にメッセージを送りました。



森田りえ子氏

卓越した描写力で表現する日本画家の森田りえ子氏は、自身が描いた真澄寺別院流瀧院(京都市左京区)の非公開の襖絵を題材に、「やっぱり京都がいい。～流瀧院襖絵を語る～うち・そと」と題した授業を2日間(11月26日、27日)にわたって実施しました。

授業は、同院に御協力いただき、実際に襖絵の前で行われました。制作の過程で学んだことや苦労された点などを説明され、学生は襖絵をじっくり観察しながら意欲的に質問していました。

授業には、一般の方や京芸友の会会員も参加され、学生とともに熱心に受講されていました。



ハンスイェルク・シェレンベルグ氏

元ベルリン・フィルハーモニー首席オーボエ奏者であり、現在は指揮者としても活躍するシェレンベルグ氏は、10月14日と15日に本学でマスタークラスを開催。管・打楽専攻のオーボエを学ぶ学生へのレッスンはじめ、オーケストラや木管の室内楽を指導され、また自らも演奏を披露されました。



新井清一氏

国内外で広く活躍する建築家の新井清一氏が、環境デザイン専攻の授業を11月22日に開講しました。

建築とデザインの関係や、新井氏が建造物・製品等をデザインする具体的なプロセスや考え方などについて、自らの代表作を題材に講義されました。



金剛永謹氏

金剛永謹氏は、通年で音楽学部の授業「音楽学演習：能楽」を担当。

能楽金剛流26世宗家である金剛氏から直接、能の謡曲を学べる機会は大変貴重で、宗家の朗々とした能の謡いが響くと、受講生はその後継に続いて発声し、謡いの強吟・弱吟の習得に努めていました。

次の方々を特別講師にお招きして授業・講座を開催しました。

甲斐賢治氏
せんだいメディアテーク企画・活動支援室長

塩田千春氏
ベルリン在住の現代美術作家

JIRO氏
特殊メイクアップアーティスト

藤浩志氏
美術家、十和田市現代美術館副館長、本学卒業生

鈴木友昌氏
ロンドンを拠点に活動する彫刻家

ロナルド・ブラウティハム氏
フォルテピアノの重鎮、パーセル音楽院教授

アラン・ゴースン氏
作曲家、フオンテンブローアメリカン音楽院教授

パイアス・チェン氏
マリバ奏者、オレゴン大学准教授

カルロ・フォルリヴェジ氏
作曲家、イタリア国立アドリア音楽院教授

オスカー・エスピナ・ルイス氏
クラリネット奏者、ノースカロライナ芸術大学教員

佐渡裕氏
国内外で活躍する指揮者、本学卒業生

堀米ゆず子氏
バイオリン奏者、ブリュッセル王立音楽院客員教授

マルティ・ルイス氏
サウンド・アーティスト

永田砂知子氏
打楽器奏者、即興演奏家

ポール・メイエ氏
クラリネット奏者

Tell me a story!

「お話し！」

客員教授

時田アリン

私は長く、浄瑠璃を音楽の側面から研究をしてきましたが、最近、浪花節にも注目しています。音楽や浄瑠璃に匹敵する豊かなメロディと物語を持ったこの芸能は、忠臣蔵をめぐる話から現代の夫婦の会話まで題材は様々。浪曲師が歌い語る世界は実に見事で、私は寄席に行くたびに、笑ったり泣いたりしながら感動しています。世間では、浪花節は衰退したと言われたり、年配の人が見るものだと思われているかもしれませんが、寄席には若いお客さんや女性も多く聴きにいらつしやいます。最近、私が学生とともに大阪で行った調査によると、ファン層は20代から90代まで幅広く、女性ファンも3割に上ります。

では、浪花節とは一体どのような芸能でしょうか。その誕生は明治時代初期。浪曲師による「節」歌う部分」と「啖呵」会話と語りの部分」の組み合わせに、曲師による三味線の伴奏が合わさって、軽妙洒脱な世界が

繰り広げられる寄席は、大衆芸能として人気を博しました。物語は、義士伝（忠臣蔵をめぐる話）、侠客もの（清水次郎長シリーズなど）、滑稽もの（左甚五郎シリーズなど）、文芸浪曲など、多種多様です。さらに、楽譜は一切存在せず、台本によって演じられるため、浪曲師がどのように歌い語るのかは、師匠からの直伝や自らの研鑽によって身に付けているのです。



時田アリン



オーストラリア・メルボルン生まれ。オーストラリアのモナシュ大学の日本研究学科の教員として長く務めている。1995年から2004年まで同大学日本研究センター所長を務めた。語り物・三味線音楽及び東アジアの音楽と近代を中心に研究している。2013年度から本学客員教授に就任、日本伝統音楽研究センターの共同研究会「浪花節の語りの音楽様式を見極める」を主宰。

【伝音公開講座の御案内】

第37回伝音公開講座「浪曲の音楽性について考える」は、2014年1月25日(土)14時から、京都市立堀川音楽高等学校ホールにて開催。現在はあまり差がないと言われる関東節、関西節など地域性による様式に注目し、関東節の系譜を引く東京の浪曲師、東家浦太郎(あずまや・うらたらう)師匠や、関西節の系譜を引き、大阪で活躍する浪曲師、三原佐知子(みはら・さちこ)師匠と松浦四郎若(まつうら・しろうか)師匠を招き、三師それぞれに「フシ」のデモンストレーションと説明、曲の口演をしていただき、比較を試みます。さらに、兵藤裕己(学習院大学教授)・諏訪淳一郎(弘前大学准教授)両先生に、浪花節の歴史や社会的な位置についてお話伺います。

What's Den-on?

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター(通称:でんおん)では、日本の伝統音楽や芸能についての研究成果をさまざまな形で発信し、多くの方に理解を深めていただけるよう、どなたでも御参加いただける講座やセミナーなどを定期的に開催しています。

日本の音楽・芸能に関する一般書籍・古文書・楽譜・録音映像資料・楽器等を収集する専門図書室も備えています。専門スタッフがお手伝いするレファレンスサービスもあり、どなたでも閲覧可能です。是非お越しください。

日本伝統音楽研究センター図書室
(京都市立芸術大学 新研究棟6階)

開室日時
水・木・金曜日
10:00-12:00, 13:00-17:00
<http://w3.kcuu.ac.jp/jtm/>

News and Report

おおふねほこ 大船鉾の裾幕などを京芸生がデザイン



裾幕を制作する覺野さん、佐藤さん、東穂さん、三富さん(写真左から)



西田さんとデザイン画



井澤さんとデザイン画

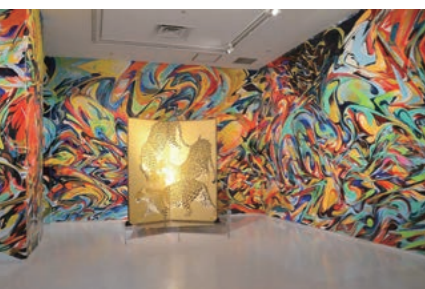
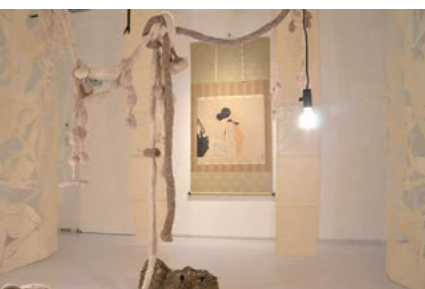
大船鉾保存会からの依頼に基づき、京都芸大の学生が、2014年夏の祇園祭で150年ぶりの山鉾巡行への復帰を目指す大船鉾の裾幕の制作を行いました。同保存会には、美術学部の授業であるテーマ演習「祇園祭と浴衣」に参加する3・4年生と大学院修士生27人が、裾幕と音頭取りの衣装をデザイン提案。裾幕は5班に分かれて2点ずつ計10点を提案し、1点を選ばれ、音頭取りの衣装は1人1点ずつ計27点を提案し、2点が採用されました。

採用された音頭取りの衣装をデザインしたのは、井澤菜梨絵さん(油画専攻3年生)と西田千紗さん(版画専攻3年生)。凱旋船鉾とも呼ばれる大船鉾にちなんで「凱」の文字や、航海の安全を願うおだやかで雄大な波を配したデザインです。同保存会には、巡行中に鉾の前面に立ち、巨大な鉾を動かす合図を出したり、雰囲気盛り上げる重要な役割を果たす音頭取りにふさわしいデザインであることが高く評価されました。

裾幕は山鉾の下方の両側面につける幅6.5m、丈0.9mの細長い布で、同保存会からの希望により、デザインした学生が制作することになりました。デザインを制作した学生6名は、澤菜梨絵さん(油画専攻3年生)と西田千紗さん(版画専攻3年生)、凱旋船鉾とも呼ばれる大船鉾にちなんで「凱」の文字や、航海の安全を願うおだやかで雄大な波を配したデザインです。同保存会には、巡行中に鉾の前面に立ち、巨大な鉾を動かす合図を出したり、雰囲気盛り上げる重要な役割を果たす音頭取りにふさわしいデザインであることが高く評価されました。

ギャラリー@KCUAのアウトリーチ 企画展を渋谷ヒカリエにて開催

ギャラリー@KCUAによるアウトリーチ企画の一環として、東京の渋谷ヒカリエを会場に、「Wild Passionate and Sticky Things」京都美術の130年」展を開催しました。3人の若手アーティスト、貴志真生也さん、谷澤紗和子さん、三木章弘さん(いずれも本学卒業生)が、本学芸術資料館の収蔵品、土田麦僊「髪」(1911)、稲垣仲静「豹」(1917)、岡文清「暗中出手」(1901)を取り入れてインスタレーションを展開。



京都が持つ独特の氣質、「Wild(野生の思考)」、Passionate(艶やかな熱)、Sticky(煩悶する自我)」が、長きにわたって新進気鋭の作家を育んでいることに着目した本展覧会。それぞれのアーティストが、今もなお鑑賞者を魅了する100年もの昔の収蔵品と自身の作品を組み合わせたオリジナリティあふれる表現を、会期中多くの方々にご覧いただきました。

アピチャップン・ウィーラセタクン氏等を 若手芸術家育成事業の講師として招へい



大学院生や若手芸術家を対象に、ワークショップやレクチャーを中心とした芸術家育成プログラム(※)を、京都芸大ギャラリー@KCUA(アカア)の学生がコーディネートして実施しています。

講師は、アピチャップン・ウィーラセタクン氏(タイ出身の映画監督/美術家)とウティット・ヘー・マムーン氏(タイ出身の小説家/美術作家)、山出淳也氏(NPO法人代表理事/アーティスト)。

プロジェクトは、2013年夏から2014年3月まで長期にわたって国内外の第一線で活躍するアーティストとのワークショップやフィールドワークなどの実践を経てその成果を発表するもの。参加者20名にとつて制作やプロジェクト実現のためのノウハウを習得できる貴重な機会であり、取組意欲は高く、成果発表が期待されることとす。

※文化庁委託事業「平成25年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」として実施

News and Report

京都市立芸術大学芸術資源研究センター開設へ ～重点事業「富本憲吉アーカイブ」研究が始まりました～

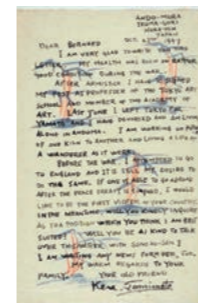
京都芸大は、2014年度から、様々な視点で芸術資源をとらえなおす調査研究の基盤であり、新たな創造の可能性を探る研究機関である「芸術資源研究センター」を立ち上げます。

本学は、先般、富本憲吉文化資料館所蔵の資料約700点を引き続きましたが、その調査研究を、新たに発足する芸術資源研究センターの重点事業に位置付けました。

人間国宝、文化勲章受章者として名高い陶芸家富本立美術大学で教授や学長を務め、陶磁器専攻科を創設し、後の人間国宝近藤悠三ら後進の指導に大きく貢献しました。引き続き資料の中には、富本がイギリス人陶芸家のバーナード・リーチと交わした書簡も含まれ、これらをアーカイブとして整理、活用することは、近現代の陶芸研究のみならず、陶芸産業の振興にも寄与することが見込まれます。

この研究の着手にあたって、12月1日には、京都国立近代美術館で、富本憲吉文化資料館館長らを招き、シンポジウム「富本憲吉のことは」を開催しました。

芸術資源研究センターでは、この事業をはじめ多様な研究に取り組み、成果を発表していきます。



バーナード・リーチ宛書簡



バーナード・リーチと富本憲吉 (1911年頃)



シンポジウム「富本憲吉のことは」の様子

京都市バスを京芸院生のデザインでラッピング

京都市バス「水族館シャトル」のラッピングのデザインを、ビジュアル・デザイン専攻 攻辰日明久教授の指導の下、桑田知明さん、楠麻耶さん（いづれも修士課程2回生）が手がけました。

京都市交通局からの依頼によるもので、水族館に来館する方が生き物にふれあうことで得られるワクワク感を表現したデザインは、子ども達はもちろん、大人にも好評で、多くの方に御利用いただいています。

また、二人が、バスのお披露目に合わせて自主制作したオオサンショウウオの着ぐるみが、京都水族館に評価され、10月からは、ラッピングバスのイラストやオオサンショウウオのキャラクターを生かした、京都芸大、京都市交通局、京都水族館の三者による産学公連携イベントを開催しています。今後の展開に御期待ください。



産業技術研究所との包括連携協定の締結

京都市産業技術研究所と相互の人材の能力向上を図るとともに、京都で育まれた芸術とものづくり技術の継承・発展を目指して、両機関の包括連携に関する協定を4月18日付で締結しました。

今後、この協定に基づき、「研究成果を相互活用した共同研究の実施」、「新技術や新素材の実用化・普及啓発」、伝統工芸技術の保存と新たな活用策の研究、「研究教育・研究の相互交流の推進」において連携協定事業を展開していきます。

管・打楽専攻にサクソフォン科目を新設



吹奏楽教育をより一層充実させるため、2014年4月から音楽学部管・打楽専攻に新たな楽器科目としてサクソフォン科目が新設されます。

これにより、同専攻の定員は14名から2名増員し、16名に変更され、音楽学部1学年の定員は65名となります。

Faculty's News

新任教員の紹介

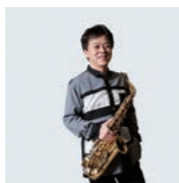
2014年4月に、客員教授の須川展也氏を含む8名の教員が着任予定

客員教授の須川展也（すがわ・のぶや）氏は、クラシック・サクソフォンの分野に脚光を浴びさせた第一人者。新設するサクソフォン科目で指導にあたります。

永樂善五郎（えいらく・ぜんごろう）氏は、千家十職土風炉（どぶろ）・焼物師。教育研究に特化した特任教授として、陶磁器専攻における実技指導をします。砂山太一（すなやま・たいち）氏は特任講師として、芸術学・デザイン学を指導します。

また、日本伝統音楽研究センターに時田アリソン（ときた・ありそん）所長が、専任教員に、伊藤存（いとう・ぞん）講師（油画）、吉岡俊直（よしおか・としなお）講師（版画）、村上哲（むらかみ・さとし）講師（ホルン）、武内恵美子（たけのうち・えみこ）准教授（日本音楽史）が着任する予定です。

須川 展也 客員教授



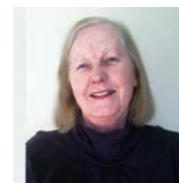
永樂 善五郎 特任教授



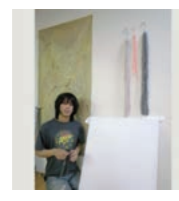
砂山 太一 特任講師



時田 アリソン 所長



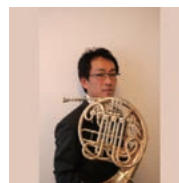
伊藤 存 講師



吉岡 俊直 講師



村上 哲 講師



武内 恵美子 准教授



退任教員の紹介

2014年3月末に、8名の教員が退任

美術学部の池上俊郎教授（空間デザイン）、魚住洋一教授（哲学）、叶道夫教授（陶磁器）、木村秀樹教授（シルクスクリーン）、鶴田憲次教授（絵画）、渡邊眞教授（デザイン史、デザイン論、現代芸術論）、音楽学部の呉信一教授（トロンボーン）、日本伝統音楽研究センターの後藤静天所長が、2014年3月末で退任となります。

それぞれの分野で精力的に活動されながら、本学の後進の育成に御尽力されたことに感謝し、今後ますますの御活躍をお祈りします。

池上 俊郎 教授



魚住 洋一 教授



叶 道夫 教授



木村 秀樹 教授



鶴田 憲次 教授



渡邊 眞 教授



呉 信一 教授



後藤 静天 所長



編集後記

第17号は、発行時期を従来の年度末から変更し、4月から12月までの京都芸大の情報をまとめました。特集では、東日本震災が起ってから3年が経とうとする今だからこそ、本学が当初から目指してきた「継続的な支援」を総括しようと、振り返りました。取り上げた活動は大学としての取組ですが、その他にも、教員や学生が、チャリティーオークションへの出品やコンサートへの出演をはじめ、被災地で展示会を開催したり、被災地の中学校の入学式で演奏したり、多彩な活動をしています。震災によって失われた生活が再建されつつある中で、芸術が人々の日常性を取り戻すものであり、生きていく上で必要不可欠であることを、改めて考える機会となりました。

京都市立芸術大学全学広報委員会一同

中西進 名誉教授が文化勲章 上村淳 名誉教授が文化功労者

2013年度文化勲章受賞者及び文化功労者として、中西進名誉教授が文化勲章（日本文学・比較文学）、上村淳（号：淳之）名誉教授が文化功労者（日本画・文化財保護）に選ばれました。

中西進名誉教授は、2004年度から2006年度まで、本学の学長として、上村淳名誉教授は、長年、本学で教鞭をとられ、1999年度から2003年度まで副学長として、それぞれ、本学及び文化芸術の発展に御尽力され、退官後も名誉教授として大学運営に御支援をいただいております。

本学教職員一同、両名誉教授の御受章を心より喜び申し上げます。

御寄付をいただきました皆様への感謝の意を込め、お名前を掲載させていただきます。

京都市立芸術大学美術学部同窓会「象の会」会長
上村淳様
ローム株式会社 様

個人の皆様からも多数の御寄付を頂戴しています。ありがとうございました。

※ 2013年3月末から12月末までに御寄付をいただいた皆様のうち、公表を希望された法人・団体等の方のみ掲載

京都芸大を御支援くださるみなさまへ ～京芸友の会～

京都芸大の教育研究等の充実を図るため、御寄付をお願い申し上げます。「大学主催の展覧会、演奏会、公開講座等への助成」「教育研究活動への助成」などから寄付用途を選んでいただき、皆様の御意向をふまえて活用します。

御寄付をいただいた方は、手続きを行うことで税控除や損金算入の措置が受けられる場合があります。また、一定の金額以上の御支援をいただいた方には本学からのオリジナル特典がございます。詳細は、大学ホームページをご覧ください。

問合せ 京芸友の会担当 電話：075-334-2200

あの響きを蘇らせるために

音楽学専攻 教授

柿沼敏江

10月1日、大学の後期の授業開始の日に、万博記念公園を訪れた。美術学部の彫刻専攻の松井紫郎先生も一緒だ。70年大阪万博のときに訪れて以来、一度も来たことがなかった。当時高校生だった私は、夏休みを利用して先輩と一緒に万博会場を訪れ、4～5日間、朝も昼も晩も「鉄鋼館」というパビリオンに通った。鉄鋼館のプロデューサーは作曲家の武満徹で、そこでは毎日のように当時最先端の現代音楽が演奏されていたのである。

当時は見るもの聴くもの、すべてがはじめての経験だった。ソプラノ歌手のキャシー・バーベリアンがビートルズ〈涙の乗車券〉のバロック音楽風の編曲を歌い始めると、聴衆はどっと笑い声をあげ、拍手喝采した。現代音楽では演奏中に笑ってもよいのだと教えられた。高橋悠治が単旋律のピアノ曲（ジョン・ケージ作曲）を片手だけで延々と演奏したときには、お客が一人二人と出て行って、最後は数人しか残らなかった。私はそのうちの一人だったが、それは最後まで聴いたら分かるかもしれないと思ったからだった。

そんな驚きと熱気に満ちた鉄鋼館の会場には、奇妙な金属製の彫刻、フランスの彫刻家バシェ兄弟による音響彫刻が展示されていた。そしてこの音響彫刻を使って武満徹の作品が演奏された。舞台ではなく、ホワイエで演奏するというので、入口付近のフロアには大勢の人たちが集まってきた。一人の男性の打楽器奏者が、円形や棒状の金属の彫刻をバチであちこち叩いて、ふつうの打楽器とは違う、変わった響きを生み出していった。ときどき音が途切れたかと思うと、またふっと音が噴き出して、奇妙な音響の複合体をつくる。それは何とも言えない不可思議な音の体験だった。

このほど万博記念公園を訪ねたのは、このバシェの音響彫刻を修復する話が持ち上がったからである。楽器はほとんどが埃をかぶり、バラバラになって鉄鋼館内に残されている。バルセロナに住むフランソワ・バシェ（弟）は90歳を越えていまだ健在ではあるが、来日は難しいという。そこでアシスタントを務めるサウンド・アーティストでバルセロナ大学教員のマルティ・ルイス氏がやってきて、70年当時、バシェの音響彫刻の制作を手伝った川上格知（かわかみ・まさとし）氏とともに、修復作業を行った。また70年当時、楽器のデッサンをし、制作を手伝った建築家のアラン・ヴィルミノ氏もその抜群の記憶力をもとに、フランスから助言を寄せてくれた。12月には修復されたこの音響彫刻を京都芸大に運びこんで、レクチャー、演奏、ワークショップを行った。武満徹は黒澤明監督の映画『どですかでん』の中でもバシェの楽器を用いた。その響きを蘇らせるために、いまフランス、スペイン、日本の関係者による国際的な協力の輪が広がろうとしている。



12月に本学で開催されたレクチャー・コンサート

70年の大阪万国博覧会における展示
提供：独立行政法人日本万国博覧会記念機構